史蹟めぐり

久保　トミ子

弓張岳より

昨夜から走り続けるバスは半眠半醒の一行を乗せて弓張岳の登山路へかかったのが午前四時すぎで、夜明けまで未だ間がある。予定より早く着いたのでバスの中で夜明けを待つ。約二時間してやっと東が白みかけた。

バスを下り友と二人で、夜の明けかけた下界を展望していると兼子教授が来られた。佐世保湾を囲むようにまたたいている町の灯は宝石のように美しい。国道三五号線と佐世保川にはさまれた地域が繁華街で、西岸の旧海軍施設跡に米軍が駐留し、海上自衛隊佐世保地方総監部もあることや、その西の旧海軍工廠跡に佐世保重工業があり、世界一のタンカーもここで生まれることを懇切丁寧に教えて下さった。

白々と夜が明けてきた。兼子教授はさらに言葉を続けて説明をして下さった。

まわりを囲む山々は三〇〇mまでは第三紀層で、これをおう玄武岩は、メサの山容を形成し、東の烏帽子岳（五六八）はダブルメサの上部峯とのことである。西の賞観岳（四三三）・愛宕山（二四〇）等のメサやビュートに囲まれた景観は荘厳でさえある。

兼子教授が、今度の旅にお出で下さったことは誠に嬉しいことで、地理学の勉強ができるが渡辺博士の不参加のことを知り非常にがっかりした。あとで立川先生におききしたら、大変御多忙とのことである。

まもなく朝食と休憩のために旅館にたちより、用意された熱い味噌汁に生き返ったようになり、朝食後はみんなゆっくりと入浴し、九時まで休んだので、昨夜来の疲れもすっかりいえたのか。一行元気な足どりで、九十九島巡りの乗船口に向かった。

九十九島―針尾

九十九島は松浦半島の西部の海上に散在する大小一七〇の島嶼群で西海国立公園の東北部にあたり、準平原化された第三紀層が沈降し、海の浸食をうけてできたもので、島は海食棚をもっていて、松の緑と海食棚の黄が海の青に映えて誠に美しい。島と島の間に真珠筏が多く浮かんでいる。佐世保付近と共に元要塞地帯であっただけに明治生まれの人間には感銘が深い。

尚この国立公園は古い文化の伝承を背景とする勇壮な外洋性の海であるが、今日は実に波がおだやかで、連休を利用した釣人達が、あそこ此處の島かげで釣を楽しんでいるのも一幅の名画である。

船は乗客が多く、頭と頭の間から首を出して眺望を楽しむ。然し、エンジンの音で、せっかくのガイドもききとりにくいときがある。昨夜の不眠のたたりで、ウトウトしている間に西海橋のアーチが見え出した。

西海橋を訪れること三度目であるが、下から見上げる景観ははじめてで、カメラのシャッターを切るひまもなく、急流に乗った船あしはますます速く、よい場面を逸してしまう。

昭和三十年、針尾と瀬戸に架けられた全長三一七m、高さ四三mのアーチ橋は、竣工当時ずいぶんマスコミに宣伝され、長崎県観光の一つの資源になったものだが、事実、この橋の完成は、西彼杵半島は針尾島を経て本土に直結し、半島の開発は急速に進められた。潮の流れは海とは思えぬ程の急流で、紺碧に、または深緑にみえる海を流れていく船の図は橋上からすばらしい景観であろう。

午後一時すぎ、橋のたもと近くに上陸、眺めのいい場所で昼食？と思えば、時間がないのでまたバス　　バスの中で進行しつつの昼食である。横着をして水筒を携帯せぬことを悔いつつ食事、お腹がすいていたせいか、とてもおいしかった。お茶の代わりに、どきつい色の少々臭いのするジュースが配給された。

バスは一分間の休憩もせず、平戸へと進む。満腹すると、居眠りにはまことによい車体のゆれ＝可憐なガイド嬢の懸命な説明も耳にはいらばこそ、みんなよく眠っている。

「ニイタカニノボレ」「トラ・トラ」の暗号が発信・受信された針尾島の無線塔の塔身が、今も虚空に高く聳えている。昭和十六年十二月八日未明、真珠湾攻撃の指令が、この針尾の無線塔から発せられたと思えば、二十九年前の凄惨な歴史が、昨日のことのように、疵あとがまた疼き出す。

平　戸

約二時間ばかりかかりやっと待望の平戸口についた。平戸島への海は約十分で渡ることができた。松浦氏の城跡に復元された天守閣を見学、それから資料館へと出向いた。松浦藩主の邸宅の立派な建造物は、城そのもので天守閣と、櫓がないだけで、高い石垣と白い塀！この建物だけでも、美術的な価値がある。時間の関係上、惜しや、ここも観覧時間三十分で、サーッとす通り、史学研究会員達は、残念で残念でならないだろうと思ったが、団体の責任者の苦労を考えずに勝手なことばかりいっては相済まぬと、あきらめて、渡船口に向う。筆者は先

年、九州大名展が博多であった時に出品されていた当館の一部の文化財を観賞したことがあるのでマーマーと胸をなでてはみたものの、我が中津藩に当松浦家の姫君が、輿入れの調度品はどんなものであったろう？持参金は、当時の金で五万円ときいたが？現中津市に住まれる奥平昌信氏（七十才位）の母君にあたられる方である。

平戸と商館

平戸島に初めてポルトガル船が入港したのは天文十九年（一五五〇）でザビエルが鹿児島から、ここに移ったのもその時である。

領主松浦隆信は、ポルトガル貿易とキリスト教の布教との深い関係に目をつけた。弘治元年（一五五五）にはインド区長にあてて、日本に来航することを希望し、自らも信仰にいる意志のあることを書いた手紙を送った。しかし、日本人とポルトガル船員との間に喧嘩がおこったことや、領内の僧侶の激しい反対運動がおきたために、布教の禁止をした。それが原因で、教会側では、大村領の横瀬浦に港を移してしまった。領主大村純忠は永禄五年（一五六二）大名として最初の洗礼をうけた。洗礼名はバルトロメヲと呼ばれた。その後、キリシタン布教に反抗しておきた大村家の内乱によって横瀬浦は兵火にかかり、ポルトガル船はまた平戸に入港することになった。

慶長十四年五月（一六〇九）二隻のオランダ船が平戸に入港した。平戸の松浦鎮信は、かねて長崎に繁栄を奪われ、自国領内の外国貿易がさびれてきたのを回復したいと熱望していた。鎮信はオランダ船の船長に口ききをしてやり、船長は東上して、家康に会見し、執政マウリッツの手紙と贈り物を進呈した。家康からの返事と非常に寛大な通商許可の朱印状をもらい平戸に帰って来た。そして湾口の北岸地に商館を建築した。この商館は長崎の出島に移されるまで続いた。今もその当時の商館の石塀の一部が残存している。

オランダ船リーフデ号＝（慶長五年漂流）の生き残りのアダムス（三浦按針）が日本で優遇されていることを知ったイギリスの東インド会社も、オランダ人に対抗して日本貿易を開拓したく、ジョン＝セーリスにジェームス一世の国書をもたせて日本におもむき、アダムスと協力して商館を開くことを命じた。慶長十八年（一六一三）平戸に入港したセーリスは、アダムスの案内で駿府の家康に会見し、通商許下の朱印状を得た。アダムスの口添えもあり、オランダの朱印状に比べて更に細かい自由通商の条件を明示し、関税免除や治外法権もおりこまれていた。貿易場所は、家康の希望をいれてアダムスは江戸に近い浦賀を希望したが、セーリスは、中国貿易やその他の条件を考えて、平戸の町で行うことになった。オランダ商館のある平戸では、日本の市場をめぐる激しい競争がおこったが、イギリスは中国貿易を開いて、

需要の多い生糸を買付けるため、たびたび、多額の金額を商館の屋主の季旦に手渡したが、だましとられたりして経営がうまくゆかなかった。

しかし元和元年（一六一五）商館の庭に、琉球からもって来たさつま芋を、日本で初めて試植し、とれた芋を皿を盛って領主に献じたということは、芋についての日本渡来説のはじめらしい。

イギリス商館は元和九年（一六二三）日本から引揚げたが、寛永十八年（一六四一）、幕府から移転命令が出され、長崎の出島に貿易場が移されるまでは、平戸は外国貿易場の花形であった。

平戸とキリスタン

姉崎博士の著者「コンコンダンス」には、日本最初の殉教者として、マリヤせんの名が出ているが、フロイス著の日本歴史には、せんの殉教した年の前年、別の殉教者の出たことが記されている。

永禄元年（一五五八）平戸の宇野殿という武士の家来は、バーデレ・ヴィレラの説教をきいたので洗礼を受けた。主人の宇野殿はそれをきくと立腹して、「私の家中には、まだ誰もキリシタンになったものはないのに、なぜ、自分の許しをうけずにキリシタンになったか、信仰をやめよ、その代わり褒美をとらせる」といった。その家来は、「家来としての勤めと関係のあることならば指図を受けるが、自分が本当の神を知ることができたのにその信仰をすてることはできない」といって従わなかったので遂に殺されることになった。平戸の番主の秘書・道家の耳に、この話がはいり、バーデレ・ヴィレラを呼び「洗礼をうけたその侍に平戸から去るようにすすめてくれ」とたのんだ。ヴィレラは「信者になったからといって、どろぼうや罪人のように他国に逃げるということは恥しいことだ」といい断った。それでも道家は十五日間平戸から他所に行くように命じた。信者になった侍は他国に行ったが、一ヶ月たっても帰って来なかった。道家は直ちに平戸に帰るように手紙を出した。信者が平戸に帰ると、宇野殿はその信者の首をはねた。平戸はしばらく誰も洗礼をうけなかった。

平戸と海を隔てた椿の多い丘で焼罪の処刑をうけた宣教師の碑が現在そこに建っている。これは昭和三三年に建てたもので碑文は「この地に於いて、西暦一六二二年（元和八年）九月十六日イタリア人宣教師カミロ・コンスタンジオ神父、キリスト教を宣布せる廉により捕えられ、焼罪の刑に處せられて殉教す、仍て、この地に殉教碑を建てその偉徳をたたえ其の名を永世に伝えるもの也」とある。帰宅後、熱心なカトリック信者の知人の紹介で、カトリックの教会に出かけ、イタリヤ人の神父さんに殉教史書をお借りして調べたが、不明であった。唯我が書棚の日本の歴史の士農工商篇の中に、平山常陳事件

のことが記載されている。それは、元和六年（一六二〇）夏、オランダ・イギリスの連合船隊は、マニラから帰航の途にある日本人、平山常陳の商船を台湾海峡で捕え、その中に二人の宣教師のいることを発見して、船を平戸に曳き、このことを幕府に訴え出た。

厳しくとり調べた後、元和八年（一六二二）になって、二人の宣教師をはじめ船長以下乗組員は処刑されている。なおこの年に、長崎で、きわめて大がかりなキリシタンの処刑が行われ、耶蘇会のカルロ＝スピノラを中心に宣教師や信者ら五十五名が火あぶりや打首にされて、これを大殉教と歴史習には出ている。平戸の公民館か、社会科担当の先生に詳細をおききしたかったが、その機会に恵まれずに残念であった。

ジャガタラお春

オランダ人に雇われていた日本人も契約期間が終われば独立して活動する者も少なくなかった。元和九年（一六二三）のバタビヤ市民名簿には、政庁の雇員以外の日本人一二〇余名がのっている。

その後、幕府はキリシタンを徹底して取りしまるため寛永十六年（一六三九）、オランダ・イギリス人の妻となって子供の産まれた者を調べ、三十余名を平戸からバタビヤに追放した。世にいうジャガタラ追放である。ジャガタラとは今のジャカルタのことで、ヨーロッパ人がなまっていっていたものである。

同地の日本移民の大多数は契約移民男子の未婚婦人と、家族移民があったが、未婚の男女は、適当の配偶を求めて結婚している。幸に当時の結婚届が原地に残っているのを記すと、

出身地	男	女	計
長崎	27	7	34
平戸	6	16	22
田平	0	2	2
大村	1	0	1
肥前	1	0	1
筑前	1	0	1
薩摩	1	0	1
堺	3	0	3
大阪	1	0	1
伏見	1	1	2
京都	1	1	2
駿河	1	0	1
江戸	1	2	3
不明	28	11	39
合計	73	40	113

この表でみるとさすがに九州出身者が多く、特に対外貿易港であり、キリシタンの栄えた長崎と平戸の出身者は半分を占めている。彼等は煙草の専売権を得る者、土地家屋の賃貸売買・果樹園農場の開墾経営・森林の伐採・金融や奴れい売買など他方面にわたって長く活躍した。長崎出身の村上武左衛門の如きは、延べ七十件＝総額五十貫匁にのぼる銀子を貸しつけている。有名なジャガタラお春も、こんな日本人の一人であった。

わずか十五才の身で母や姉といっしょに、同地に追放されたが、その後、縁あって、東インド会社員シモンセンと結婚し、四男三女をも

うけた。洋名はゼロニモ・マリヤで、夫の死後、お春は遺産にたよって豊かな生活を送り、家には十数人の奴婢を使っていたが、つぎつぎと子女に先立たれ、元禄十年（一六九七）の春、追放後五十七年間におよぶ、異郷での生活を淋しく閉じた。時に七十三才で、死の直前にしたために遺言状の署名こそは、お春がこの世に残した唯一の自筆の書であると学者はいう。「あら日本恋しや、ゆかしや、見たや」と結ぶ世に伝えるお春のジャガタラ文は、後世文人の手になるものらしいという学説もあるが、お春と同じ境遇に泣いた平戸生まれのコルネリヤの手紙は実際、今も二通、ふくの手紙一通、こしょうの手紙一通、その他一通計五通が残っている。

長崎の鶯は啼く今もなお
ジャガタラ文のお春あわれと、（勇）

ジャガタラ文がお春のものか否かより、流されて五十七年の長い間、日本を慕いつづけながら死んでいった同じ運命の人々の心情を憶うとき、誰が涙しないものがあり得ようか。

数々の歴史を蔵す平戸をあとに一路、名護屋城址に向かう。炭坑の閉鎖による人口減の松浦市をはじめ、産業・経済・地勢・を通過する町村別に詳細に兼子教授の御指導をたまわりつつ名護屋城址についたのは二十三日の正午すぎであった。

名護屋城址

元亀・天正時代のいでたちの武者姿がバスの中から見えた。映画のロケイションでもあるのかと、みんな大いそぎで下車していくとロケではなく、太閤殿下の家来の出迎えで、「これはこれは、大分の皆様方には、よくこそお出で下さいました。さき程より、ここにてお出迎えいたしております拙者は、太閤殿下の家来にて熊本肥後守澄男と申し、当、名護屋城址の御案内をつかまつる者にてござります」とこわいろも名調子、見学の一行、大いに感服、バスの長旅の疲れも消え、鎖西町の町長をはじめ、観光課吏員のアイデアーにほとほと感心していると、あにはからんや、町当局に雇われているのでなく、私設の観光案内係で、本職は八百屋、本名は熊本澄男、解説料一回五百円也!!ここも三十分間の見学予定であったが、当城の主、太閤殿下の御家来に、おもしろ、おかしく説明されて回るうち、ついつい時も移り、城址の展望台から玄海灘を見おろし、四百年昔の秀吉の遠大な理想を偲んで、やがて、城址に別れをつげ、唐津に向かい、公害に枯れの見ゆる虹の松原を通り抜け、元炭坑主の持物であった豪壮な料亭でおそい昼食をすませ、鏡山に登った。鶴の羽をのばした形にみえる虹の松原と舞鶴城を山上から眺め、またよく整理された唐津平野を下にみる頃は、ようやく、夕色がただよいはじめていた。

× × × × ×

唐津焼の窯元によることは断念して一路、帰途についた。十一月二十一日から三日間に亘る旅のお世話をして頂いた先生方に、満腔の感謝を捧げて、中津に下車したのが午後八時、大分方面のかたがたは、まだ二時間はかかることを思い、この上の御無事を祈りつつ、闇の中に遠くなるバスの灯を見送った。

（大分県地方史会員研究旅行記）

十一月二十一日――十一月二十三日

参考資料

兼子教授編　旅のしおり

日本歴史　土農工商編

（大分県中津市上宮永四丁目　久保トミ子）